戦時下の女学生 （昭和時代）

学びや タイムスリップ

もんぺ着用、義務付け

写真①京都霊山護国神社に参拝する生徒たち（1942年2月、明徳高所蔵）

写真②三菱工場での勤労動員の制服（1944年ごろ、『家政学園創立七十周年記念誌』より）

写真③学校工場の様子（1944年、『写真で見る125年史　平安女学院』より）

女学生といえば、きらびやかで上品なイメージがあります。終戦直後までの女子中等普通教育を担った高等女学校（以下、高女）に通う生徒は、その代表格でした。しかし1937（昭和12）年に日中全面戦争が始まり、さらに41（同16）年12月に対英米戦に突入したことで、戦時下の女学生たちはこのような明るいイメージとはほど遠い生活を余儀なくされます。

まず、38年から、夏休み期間に3～5日の「勤労作業」が課せられます。翌年には「勤労作業」が正規の授業時間にも行われるようになり、これは授業に準じた扱いをされるようになりました。たんぺの着用が義務付けられます。上着も、全女学校で統一された、個性のない制服に代わります。

40年からは「ぜいたくは敵だ」という風潮が強まり始め、あらゆるものの画一化・均一化が始まります。対英米開戦はこの風潮をさらに後押しし、翌年には一部の例外を除いて、制服からスカートが消え、もんぺになっています。制服にあこがれて高女に入った女学生たちは、戦争が終わるまで、あこがれの制服を着て登校することができなくなったのです。

43年6月の「学徒戦時動員体制確立要綱」により、本格的な学徒勤労動員（学徒＝学生・生徒の略称）が始まります。この後、矢継ぎ早にこの「学徒動員」に関する要綱や法令が定められ、女学生たちは各学校・学年で決められた工場等へと動員されます。

写真①は、42年2月に明徳高女（現明徳高）の女学生が京都霊山護国神社（東山区）を参拝した時の様子です。このようなイベントがあること自体が戦時下の特徴なのですが、服に注目すると、上がセーラー、下がもんぺになっています。制服にあこがれて高女に入った女学生たちは、戦争が終わるまで、あこがれの制服を着て登校することができなくなったのです。

写真②は、工場に配属された家政高女（現京都文教中・高）の女学生です。頭には工場の帽子、右胸には「学」の字のバッジを付けています。さらに、各高女には学校工場が設けられ、校内での「動員」も行われました。

写真③は、平安高女（現平安女子中・高）の学校工場です。女学生たちが「神風」と書かれた日の丸の鉢巻きをしていることが分かります。

（京都市学校歴史博物館　学芸員　和崎光太郎）

◇

今回紹介した写真は学校歴史博物館（下京区）の企画展「京都の高等女学校と女学生」（29日まで、水曜休館）に出展しています。